

[講演会]

「コルテス——その才能の諸地平」(後)

アンヌ・ユベルスフェルト

佐藤 康 訳

主要な地平：アフリカ

コルテスはアフリカを夢見ていた。コルテスがアフリカに発見したもの、それは言葉にできない荒々しい衝撃であった。「空港の出口から出たとたん、私が鞆のなかにつめてきたアフリカに対する考えは凍りついた。私が見たのは、黒人の警察官が、警棒を振り上げ、同胞を力いっぱい殴っている光景だった。」コルテスは「分断」の感覚に捉えられる。悲劇的な感覚だ。「目には見えないが、あまねく存在する障壁が、一方に白人たちを、そして他方には黒人たちを切り離していた。」そこに耐え難い「憎悪」の感覚も加わる。自らの肉体的な欲望の対象が黒人であることを、自身、知っていたがゆえに、それはますます耐えがたいものとなった。この「境界」における啓示から、コルテスのもっとも美しい作品のひとつ、『黒人と犬の闘い』が生まれた。コルテスはこの作品を直ちに書いたわけではない。コルテスがこれを書いたのは、遙か隔たるもうひとつの「地平」、もうひとつの文化を持ったマヤ文明の国、グアテマラの、アティティアンという湖のほとりであった。

しかし、この発見以来アフリカは、コルテスにとって個人的な「地平」であり続けた。アフリカはコルテスの虚無の思想を育んだ。『黒人と犬の闘い』の登場人物、レオーヌもその思想を語る。レオーヌに対するコルテスの註釈を見よう。「川面に浮かぶ、すでに腐敗が進んで膨れ上がった死体が黒い鷹の群れにつつかれて、ゆっくり流れているのを見たレオーヌは、片手を口に当てて思わず叫びそうになってのどをつまらせた。人間は何と、砂つぶてのようにちっぽけなものがあるか、と。」

アフリカはひとつの「地平」となった。コルテスは後にこう言っている。「私にとって、アフリカはすべてのために決定的なものだ。すべて。すべてである。アフリカなしに私はおそらく書くことはできないだろう。信じがたい特権を受けている人がいる、関心をもたれていない人々がいる、無価値の人々がいる、そういった思い出が脳裏になれば、書けなかっただろう。」コルテスはこうも言っている。自分のどの作品のなかにも「小さい存在であっても、隠れた存在であっ

ても黒人がいる。」と。

アフリカに注いだ眼差しがコルテスに明らかにした、この暴力、この美しさ、この彼の血肉となった他所から、コルテスは作品を書かねばならなかった。そして明らかとなったのは、コルテスが主題としたのは、また主張しようとしたのはアフリカそのものではなく、血肉となったその経験だということだった。「私はかつて今も思っている。アフリカの奥地から聞こえてくる、あの見張りたちの叫び声、不安と孤独のあの囲われた土地、それが重要なテーマなのだ。」(Europe 1, 1983)

間違えてはいけない。コルテスが語っているのは、演劇の本質なのだ。演劇は、世界の目的と、その世界を受け入れる自己、厳密に言えば世界を再創造する自己とを同時に語る「経験」の成果でしかありえない。

コルテスの経験、それはアフリカの肉体への欲望、そして花々の美しさである。「夜になると、ひとりで散歩に出かける。ブーゲンビリアの紫色の、ばら色の枝を手にとって、そっと唇に押し当ててみる。どれほど美しい花であることか。この花には香りはない。」(ジニューへの手紙)。美しい景色を前にしても、この他所でコルテスが見出したのは人間なのだ。人間自身にかかわることではなければ、これほど演劇に近い経験とは言えないであろう。「私が関心を持っているのはアフリカ人だ。ラテン・アメリカでもそうだった。私が関心を持ったのはただひとつ、それは人々だ。」

コルテスが自分のものとしたこのアフリカを彼はまたもうひとつの世界との接触の中でしか書くことができなかった。それはグアテマラのマヤ文明の世界であった。1年後、そこで『黒人と犬の闘い』が書かれる。それはスペイン語を話す人もいない、小さな村であった。

コルテスが憧れていた大演出家、パトリス・シェローがこの作品を読んで高く評価し、ナンテール劇場で上演したのも驚くべきことではない。それは素晴らしい演出、またピコリ、ミリヤム・ボワイエが出演する素晴らしい舞台であった。作品はアフリカのとある建設現場。白人の現場主任のひとりが

誤って黒人の労働者を殺してしまう。その黒人の兄弟が、遺体をお返し願いたい、と要求しにやってくる。主任は遺体の引き取りに伝えられない。彼は遺体を下水に流してしまったのだから。そして主任は、前の日にここへやってきてアフリカに魅了されたひとりのフランス人女性の目の前で、殺される。彼女はヨーロッパへ帰っていく。ある一体験という以上の豊かな経験をして帰っていくのだ。ほとんど物語らしい物語はない。しかし観客は疑いもなく、この作品に美しさを認めた。

またひとつの他所、またひとつの「地平」はニューヨークだ。そこはコルテスの眼差しが集中する特別な場所なのだ。具体的には、それは埠頭である。「廃屋となったドック、そのなかで私は身を隠して幾日か、夜をすごした。はなはだしく、尋常でない場所だった。そこは浮浪者の、ホモの、麻薬密売人の隠れ家、闇取引の行われる場所だった。そこには警察官もやってこない。通常の秩序はない。きわめて不思議なもうひとつの秩序が形成されているのだ。」(Europe 同) コルテスによれば、ここに生まれているのは、もうひとつの世界への出発点となる、もうひとつの秩序が支配する世界における、ある場所への「つながり」である。それは演劇創造への出発点でもある。ひとつ新しいことがある。登場人物が多くなったことだ。家族の登場である。その作品を上演したのもシェローであった。しかし期待に反して上演は成功を取めなかった。重厚すぎる装置、可動式装置の移動を多用するセノグラフィーが原因だったのだろうか？あるいは中心的人物がいないため、話が複雑になってしまったからだろうか？しかし上演キャストには、コルテス自らの演劇的才能にとって輝かしい女優、マリア・カザレスが名を連ねていた。とうとうカザレスがコルテスの作品に出演するようになったのだ。この作品『西埠頭』が半ば失敗に終わったにしても、その後書かれた作品はそうではなかった。おそらくコルテス作品のなかでもっとも美しい『綿畑の孤独のなかで』が書かれたのだ。上演は、作者コルテスにも、またシェローにも栄光をもたらした。シェローは95年にも素晴らしい再演出を行っている。前作とは打って変わって、はっきりと規定されない、夕闇の街路という、どこでもない場所が場面となっている。コルテスの人物にはおなじみの「地平」のなかで、二人の男が出会う。人気のない街頭のなかの孤独、そして欲望の出会いだ。この作品は欲望の作品である。一方の男が相手の男に何かを売りつけようとする。男の「欲望」を満たすものなら何でも売ろうというのだ。しかし、どんな欲望なのだろう。最後の対決の瞬間まで、私たちには分からない。この作品に隠されている黒人は、題名のなかにあるアメリカの

「綿花」が黒人によって摘まれるところにある。上演ではデューラーをアイザック・バンコレが演じた。

この時期、コルテスは美しい小品『タバタバ』を書いている。これも名づけられない欲望をめぐる作品だが、こちらは兄と妹の近親相姦の欲望をめぐる作品である。

コルテスは遅かれ早かれ自分が死ぬ定めにあることを知っていた。エイズに感染していたのだ。『ロベルト・ズッコ』で主人公が言うように、「死にたくない。でも俺は死ぬ」のだ。こうした行く末への展望が、コルテスを子供時代への、家族への、田舎への地平に導いた。コルテスは『砂漠への帰還』を書く。アルジェリア戦争の追憶と、「奥深いフランスの田舎」とが、アルジェリアで暮らしていた女性が、弟のいる家族のもとへ帰ってくるという枠組みの中で描かれる。進歩しない観念にとらわれた田舎のブルジョワジーに起こる家族の衝突、政治的衝突だ。作品はジャクリーヌ・マイランが演じる女性を中心に展開する。上演が全体として見事なバランスを保ったのは、弟を演じたミシェル・ピコリの功績である。この作品に隠された黒人は「黒人の背が高いパラシュート隊員」だ。この一家の娘に黒人の双子を生ませるためにだけ登場する役割である。

またひとつ、経験の要素がある。コルテスは連続殺人犯ロベルト・スッコの写真を見た。「その年(1988年)の2月、私はメトロの構内で、警察官殺しの犯人を指名手配するポスターを見た。私はその顔写真に魅了された。しばらくして、私はテレビでその男の顔を見た。その男は刑務所に入れられてもたちまち看守の手をすりぬけて脱獄し、世間を挑発する。(…)信じられないような事件の連続、神話的な人物像、サムソンあるいはゴリアテのような英雄だ。力の怪物、それが最後には石ころ一つ、あるいは一人の女によって倒されてしまう。」(ル・モンド 88年9月26日)。コルテスはスッコの生の声の録音も聞き、その言葉を作品のなかでほとんど一言一句変えずに使っている。「遅かれ早かれ、人はみな死ぬ。みんなだ。それが鳥たちを歌わせるのだ、それが鳥たちを笑わせるのだ。」ここでのアフリカは？アフリカはこの殺人者の夢のなかに出てくる。「誰も知らないけど、アフリカに雪が降るんだ。それさ、僕が世界でいちばん好きなのは。アフリカの雪、氷が張った湖のうえに降るんだ。」

コルテスは『ロベルト・ズッコ』の上演を見ることがなかった。コルテスは1989年4月15日に死んでしまう。メキシコとグアテマラへの最後の旅から帰ってきてのことであった。

空間の悲劇

コルテスのエクリチュールに顕著な特徴は、いわば古典悲劇にも通じる「エコノミー」にある。このエクリチュールはまた同時に、ジュネやベケットを偉大なる先駆者として持つ、「集中」へと向かう現代的エクリチュールの総体とも関係をもっている。

時の一致については、どの作品も、筋書き上の時間と上演の時間を近づける連続性が保証されているが、『ロベルト・ズッコ』のように時の一致が守られてない場合でも、全体的には主人公の心理内容を感じられるようにしてある。あたかもズッコが作家と、そして観客と同じ瞬間において一緒に居るかのように書かれてある。

むしろ空間の問題が重要と考えたい。コルテスはこう言っている。「私は戯曲を書くことができない。登場人物に没入することができないのだ。私は登場人物にただの入れ物を見出すだけだ。」コルテスの悲劇は、世界における場所の悲劇である。どこでもいい場所ではない。『綿畑の孤独のなかで』においても、たしかに綿畑ではないが、場所については会話の中で詳細に示されている。そこは空虚で、しかも苦しみに満ちている場所である。客が「ある明かりのついた窓」から「もうひとつの明かりのついた窓」へと歩いて向かう街路であり、「エレベーターが下の階であなたを降ろす。そのとき、エレベーターは、上の階では望みもしなかったものばかりの只中を、腐りきった思い出のあふれる只中を歩くよう、あなたに罰を下した」のだ。この場所を不可解なものとしているのは客のほうである。「はっきりと定められる場所でもないこの場所の、はっきりと定められる時間でもないこの時間の、はてしもない孤独」なのだ。そして、その場所の危険を口にするのはディーラーのほうだ。「怒りに狂った人間たちと動物たちの敵意の中で」である。コルテスの劇中空間のもっとも極端な形象は、『森の直前の夜』の街路であろう。街路は孤独＝地平の空間でもあった。また、『黒人と犬の闘い』のアフリカの工事現場である。『西埠頭』の廃墟となったドック、麻薬密売の巣窟もそうだ。もっと私たちに馴染み深く、危険もなく、明確なのは、『砂漠への帰還』の田舎町のアパートマンやカフェだろう。『ロベルト・ズッコ』では、殺人犯はワルツでも踊るように逃走していくが、殺人犯のたどる道は、他者の領域として一步一步明確に示されている。しかし同時に、コルテスに言わせればそれは登場人物たちがつねにそこから去ろうとしている、かりそめの場所でもある。

登場人物が一瞬一瞬語るのは空間についてなのだ。空間、より正確に言えば場所は語り手の各々に、自分たちの他者へのつながりはいかにあるのか、どこにあるのかを語っている

のだ。

求愛の悲劇

コルテスのテキストの中で一瞬一瞬、あらゆる場所で語られるのは、他者とのつながりである。仕種も、言葉も、ときには沈黙までもが語る。そして直接間接を問わず、つながりとは要求のことだ。要求ははっきり口に出されないこともあれば、婉曲的に言われることもある。（『ロベルト・ズッコ』の最初の場面でズッコが母親に要求するズボンのように。）ときには、何が要求なのか分からないこともある。答えのない質問そのものが作品の意味になっているのだ。

登場人物が話しかける他者がまさしく他者であることを、つまりべつの「空間」に属する存在であることを、そして知らない人間であることを、知りたいと思っている人間であることを、さらには求愛がその人物に向けられるものであることを語っているのは、場所そのものだ。求愛は他者が不可能性そのものであればこそ、なおさら強いものになる。求愛の不可能性、それは人間にとってプリミティヴなものだ。小さい子供が母親に向けてする求愛だ。文字通り刷新することが不可能なもの、それこそがコルテスにおける他者への求愛の不可能性が語るものなのだ。他者の地平とは、まさしく自分の地平ではない。それはコルテスの初期の作品以来すでに表れている。『森の直前の夜』でも『黒人と犬の闘い』でもそうであった。そこにはレオヌが黒人のアルブリーに向けて歌う素晴らしい「歌」がある。

「ああ、黒い色、それは私のあらゆる夢の色。私の愛の色。誓うわ、あなたがお家に帰るなら、私もいっしょに行く。あなたが『私の家』って言ったら、私も言う、『私の家』って。」これこそが、コルテスにおける求愛である。それは作品のいたるところに見られる。そして悲劇、闘いが生まれる。求愛は永遠に「企業・組織」と対立する。システムの法則と対立するのだ。

しかし、その求愛こそが、コルテスの才能を生んだのだ。コルテスのエクリチュールの詩的な美しさ。少女が殺人犯ズッコに求める白鳥の歌のような求愛のなかにも詩がある。コルテスにおいては、内容はつねにそのエクリチュールのなかに存在するのであり、登場人物たちはテキストの音楽的な営為と結びつき、挿話を神話に変えるのである。（了）

付記 前号に続き、ユベルスフェルト先生の講演を掲載いたします。講演の最後に先生は『ロベルト・ズッコ』の一節を朗読されて、貴重な一時間のお話の結びとされました。なお、2010年11月、ユベルスフェルト先生はご逝去なされました。心よりご冥福をお祈りいたします。（ね）